

職業訓練の現場でのできごと

小林 辰滋（元雇用能力開発機構）

その1．障害者訓練でのできごと

筋ジストロフィーという難病を患っている一人の若者が職業リハビリテーション生として入所し、一年間の職業訓練を受講した。訓練には精力的に取り組んだ。彼の病に関する医師の判断は余命1～2年とされていた。

当然のことながら彼は訓練終了後に就職を強く希望し、関係職員一丸となって就職先を確保する努力を精力的に行ったが、困難を極めた。

そうしたなかで、ある中小企業の社長が“たとえ1年であっても、40年の職業生活も同じことではないか”と採用してくれた。

彼は一年後に逝ったが、“彼は立派な職業人生を貫いた”とその社長は述懐した。

個々人の生き様、尊厳と職業訓練の深い関わりを実感した出来事である。

その2．職業訓練短期大学校での事業主団体との協働による人材育成事業から

ある県内における機械系企業団体に所属する10企業から、将来のリーダ候補20人（設計専門1人、加工専門1人）を推薦してもらい、企業及び専門の異なる者2人一組、計5チームによる機械部品の設計・加工の研修を期間1年で実施。

真の協働の姿を実現するため、実習は短大側が担当、専門学科は主として構成企業の役員クラスが担当とした（事後談ではあるが、学科担当者は密かに専門書を購入し、予習したとのことであった）。

研修期間中、合宿と称して、受講生も含めた関係者全員で企業の保養施設を借りて、計3回の懇親会を行った。

日常、県内の同業の社員が交流することはなく、この研修の直接的効果（設計サイドから加工サイドの問題、加工サイドから設計サイドの問題それぞれが互いに理解できたことなど）は無論のこと、その後の自主的グループ活動が生まれ、継続されている。

職業訓練の成果は多様で、その意義の大きさを実感した出来事であった。

その3．離職者訓練受講生の態様の変化に驚く

当然のことながら、離職者訓練の開始当初は受講生の姿は全体として物静かであり、何となくぎこちないものである。ところが、訓練に取り組む中で次第に会話も増え、生気が生まれてくる。

喫煙室でうつむき加減で一服していた者が、なんと明るくなったことかとかと驚かされることも多く目にする。

訓練課題の進捗状況と問題解決の仕方、役割分担に関すること、果ては、求人情報の交換や会社面接時の体験談、ときには将来設計などの会話が弾んでいる。

職業訓練の場は働くことと学ぶことの一体感を醸し出し、自らを前に進めさせる力を与えていることを実感することは日常茶飯事である。

その4．訓練生の掃除姿と就活と

ある職業訓練短期大学校へ事業主の一行が見学にくられた。実習の終わり頃に出くわした時、ある事業主が機工具の整理や機械の切粉などの清掃をしていた訓練生を指して、“あの子は就職の内定が未だであれば、うちで採用したい”と言いだした。

理由は明らかである。“あれだけきちんと実習を終える人材が欲しい”である。

職業訓練に取り組む姿は下手な就活ノウハウを学ぶより有効であることの事例であろうか。

その5．面接ベタの驚く就職

ある職業訓練短期大学校の訓練修了予定学生の中で、数回の採用面接で不可となった者がいた。その理由は、訓練には熱心に取り組んでいるが、どうも今様で言う「コミュニケーション力」の低さが、面接がうまくいかないようである。

担当の先生から小生にどこか採用予定の企業を紹介してもらいたいという依頼を受けた。

旧知の県内企業の社長に話をしてみたところ、“うちには余計なことを喋らなくてもやってもらいたい仕事は沢山ある”と言ってくれた。

その後、無事にその会社に採用となり、今は中堅社員として活動しているとのことである。

これは事後談であるが、“なんで彼があのような県内有名企業に採用になったのだろう”という学生がいたとのことである。

コミュニケーション力は必ずしも就活の決め手にはならない！？と言いたくなる出来事であった。

上記のような職業訓練の事例をみると、“下手なキャリア教育は無用では”と考えさせられる。これは言い過ぎでしょうか。